

夫婦で子育ての社会への道のり

The Way Toward the Society of Child-Raising by Couple

吉田 充 Mitsuru YOSHIDA

大学で農芸化学を専攻した私は1981年に修士課程を修了し、農林水産省系の研究所に勤め、32歳の時にアメリカに留学する機会を得た。帰国後に留学前からつき合っていた人と結婚したが、今度は夫にインドにある国際半乾燥熱帯作物研究所(ICRISAT)でプロジェクトリーダーとなる話があり、国際プロジェクトに興味があった夫はその話を受けてインドに赴任した。その後私も何とかポスドクのポジションを得て、生後6ヶ月の息子を連れてICRISATに赴任し、害虫の食害が少ないヒヨコマメ品種に含まれる害虫抵抗性化学因子の研究を行ったが、私の2年の任期終了前に夫の赴任の任期が切れ、私は息子とともに8ヶ月インドで暮らすことになった。インドでは、メイドと庭師、ベビーシッターを雇って、一戸建ての研究所の借り上げ家屋に住むという日本で考えると優雅な暮らしだったが、水道水は濾過後煮沸しないと飲めない水で、気温40℃を超える夏のさなかに頻繁に停電や断水があり、庭にはコブラが出没するという快適とは言い難い面も多々あった。女独りで幼子をかかえての開発途上国暮らしは、健康に充分気をつけ、災害や災難にあわないように気を張っている毎日だった。

帰国後しばらくは筑波で夫婦ともに研究を続けていたが、息子が4歳の時にまた夫に海外赴任の話がきた。今度はフィリピンの国際稲研究所(IRRI)である。また私が子育ての責任を独りで負うのかと思うと気が重くなったが、発想を変えて私が独りで背負うのではなく子供と二人で暮らすのだと思えたとき、幼児でも共同生活者としてできることは手伝ってもらい、一緒にやっといこうと気楽に感じられるようになった。父親が単身赴任ならば、子供もその事情に合わせて成長する術を身につければよいということで、たまには子供を夫の元へ送って、彼もフィリピンの暮らしや学校を体験して良い国際経験が得られ、また母親抜きで親父と息子の良い関係も築けたようである。夫は今でも海外出張は多いが、息子が小学校1年の秋に単身赴任を

解消して、以来日本をベースに仕事をしている。

私が研究を始めた30年前は、男は滅私奉公、夫婦は夫唱婦随という言葉がまだ十分に現実味をもっており、30歳を過ぎて独身で仕事を続ける女性は明らかに嫁に行き遅れの変わり者として扱われた。そのような時代に、30歳過ぎでの独身留学、結婚してからも妻が仕事を続けるために夫が単身赴任、また妻が子連れで海外に居残りをした私達は、実家や職場から常識はずれという視線を投げかけられたこともあった。それでも、世間の常識より、自分たちがよいと思う道を選んで生活し、子育てをしてきた。そして今、多くの女性が自分の生き方を守りキャリアを続けるため、「遠距離恋愛」や「別居婚」、「シングルマザー」が普通の言葉となり、その結果非婚率も上昇し、政府が少子化対策に頭を悩ます世になっている。非常識を恥じることなく正しいと思った道を進めば、自然と後輩達と同じ道を進み、非常識が常識となることを実感した。そこで、若い人には、今の常識に押しつぶされることなく、新しい発想で人生を歩んで新しい世界を拓いてもらいたいと思っている。

しかし単身赴任家庭での子育てを経験して、男女共同参画のために何が大事かと今問われれば、私はまず夫婦が一緒に子育てができる環境と答えるであろう。夫婦がキャリアアップをはかりつつ一緒に子育てができる環境を作ることが、一番の少子化対策となろう。それには、家庭を犠牲にした滅私奉公や、転勤を昇任・昇格の条件とする職場の慣習を廃したり、男女が生活に合わせて転職をしやすい環境を作ることが必要と思う。今の日本は終身雇用が崩れ、労働市場の流動化で確かに転職の多い社会となっている。しかし非正規労働者が増え、雇用者の都合で退職、転職を迫られる社会ではなく、まず働く者が自らの意志でキャリアと生活環境改善のために転職をすることができる自由な労働環境、社会環境を作る必要があると感じている。



吉田 充 Mitsuru YOSHIDA

(独)農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所
食品分析研究領域長
農学博士

東京大学大学院農学系研究科(農芸化学専攻)修士課程
修了
専門は農芸化学、分析化学
E-mail: mitsuru@affrc.go.jp